●加賀騒動はなぜ起こったか？

加賀藩の極盛期は五代綱紀時代、その綱紀が享保八年（１７２３）に隠居し、吉徳が六代藩主に襲封した。この頃、藩財政は困窮の一途を進んでおり、吉徳は藩士の除地（削封）、商人からの借財でなんとか凌ぎながら、軽輩ではあるが理財の才に長じた大槻朝元を重用して、その対策に当たらせた。

大槻は足軽の子で、始め御居間坊主であったが、聡明で利発なところを吉徳に気に入られ、享保十一年五十俵取の御徒士並の士分に上げられた。以後、大槻は波状的に加増を受け、その回数二十一回におよび、ついには知行三千八百石を得て、藩士としては最高位の人持組に上り詰めた。

大槻の異常な出世の裏には、吉徳との男色関係にあったといわれるが、それだけではこのような昇進ができるわけがない。大槻は吉徳の期待に応えて、財政再建に取り組み、いちおうの成功を収めている。かれの施策は倹約を推進し、大坂御金御用の笠間安右衛門らの能吏を金融に当たらせると共に、横目（諜報機関）を掌握して諸役人の勤怠・動静を探らせ、町人を代官下役に任じて、新種の税目を立てるなど、次々と新手を案出して収入源の増加を図った。

倹約では硬直化した藩の出費の節減をはかって効果をあげたが、こうした政策が一部の猛反発を買うことになる。とくに大槻の異例の出世を喜ばぬ老臣たちが多く、その先頭が前田土佐守直躬と学者の青地礼幹であった。

直躬は前田八家の筆頭で、その祖は利家の子であるという家柄であり、禄高一万一千石であった。その直躬が享保十九年、家柄を誇って主家と同じ「剣梅鉢」の紋を用いて問題となり、吉徳の機嫌を損ねて、加判の職を免ぜられた。直躬はこれは大槻の讒言によるものだと恨むこと尋常ではなく、世子の宗辰（むねとき）に接近して、しきりに大槻弾劾の上書を提出した。

その趣意は、大槻は吉徳の君寵をたのんで**旧例古格を破り、独断先行、微賤の者を登用**しておのれの党派としている。青地礼幹は、大槻が城内獅子の御蔵の軍用金に手をつけ、大坂商人に売ったことを難じた。しかし、吉徳が生存中は表立って、大槻の排斥はできなかった。

●デッチあげの「加賀騒動」

延享二年（１７４５）六月十二日、吉徳が死去し、宗辰（むねとき）が相続すると局面は一転し、大槻は近習から表向御用に押し出され、翌三年七月には蟄居・閉門を命じられた。さらに翌四年十二月、越中五箇山へ流刑にされた。

ところが、不思議なことに大槻の罪状を明確にする史料は何もないのである。ただ、吉徳の病気中の仕方が「数年の御厚恩を忘れ、不届至極」というだけで、これには大槻は不服で大いに抗弁した。吉徳の病床で大槻は大小便の世話までしている。とても病中の仕方云々は承知できなかったろう。

が、吉徳という庇護者を失った大槻の断罪は規定の路線だった。この間、宗辰

がわずか一年四ヵ月で病死し、八代藩主に重熙（しげひろ）が就いている。宗辰は大槻嫌いであったが、また直躬についても「貴公はとかく独りよがりでいけない」と信用していなったという。それで、宗辰の死を機会に、大槻の流刑を前藩主（宗辰）の遺志であるとして断行したのである。

重熙は大槻断罪には懐疑的で、老臣たちが財政逼迫の責任も大槻の専制政治が原因のように言うのを「大槻の罪状ばかりを申すが、その方らはいったい何をしていたのか」と叱ったという。これで終われば加賀騒動は一件落着であったが、そうはいかなかった。

ここで吉徳の子供をみてみよう。

⑥ 吉徳	宗辰⑦	（母）浄珠院	延享二年七月～延享三年十二月	２２歳
	重熙⑧	（母）心鏡院	延享四年一月～宝暦三年四月	２５歳
	利和	（母）真如院		
	重靖⑨	（母）善良院	宝暦三年五月～同年十月	１９歳
	八十五郎	（母）真如院		
	重教⑩	（母）実成院	宝暦四年～明和八年致仕	４５歳
	治脩⑪	（母）寿成院	明和八年～享和二年致仕	６５歳

吉徳の死後、宗辰、重熙、重靖（しげのぶ）と続けて早死にしたが、なぜか、真如院の生んだ利和と八十五郎の二人は相続者から外されている。

ちょうどその頃、真如院にからまる毒殺未遂事件が起こった。真如院の生んだ八十五郎を老臣村井長堅の嗣子にするよう重熙から命ぜられたので、真如院は八十五郎を連れて金沢へ向かった。ところが、その後で江戸藩邸で重熙と浄珠院の暗殺を企み、鑵子（かんす）に毒薬を入れたものがあった。探索した結果、真如院の生んだ楊姫付きの女中浅尾があやしいということになり、拷問など加えて、真如院の命令で置毒をしたと自白させた。

どうも強引に真如院を犯人に仕立て上げようとした疑いがある。この毒殺未遂一件は、重靖を生んだ善良院一派が利和を相続順位から排除するために仕組んだ謀略だったともいわれている。しょせん、大奥の女たちの隠微な勢力争いが原因であった。金沢では真如院は縮所（しまりしょ）に幽閉され、吟味を受けたが徹頭徹尾これを否定した。さらに真如院の居室を調べたところ、大槻の手紙が発見されたとして、これを密通の証拠として問題化した。とにかく真如院を蹴落とせばよかったのである。手紙の真偽はどうでもよかったのだ。

背後で画策したのは前田直躬らであったようだ。重熙は真如院の幽閉を命じたが、結局、密殺された。置毒の容疑者浅尾も拷問を受けた上で殺害されている。むろん、この事件は大槻と直接の関係はない。大槻は越中五箇山で幽閉されていたが、兄や彼が組織した諜報機関から事件の情報は伝わっていたという。

しかし、寛延元年（１７４８）九月十二日、大槻は縮所内で自害した。自害用の小刀や衣裳も、秘密ルートで入手していたものだったが、その後、兄や一族など一味関係者はつぎつぎと処刑された。

●加賀騒動のその後

いわゆる加賀騒動が落着したのは宝暦四年（１７５４）であった。延享二年吉徳が死んだあと、わずか九年間に宗辰、重熙、重靖と次々に早死にしている。矢つぎ早の藩主交代は、百万石の格式をもってする吉凶の儀式（藩主襲封の諸方面の挨拶・葬儀法要）だけで、たいへんな出費であった。宝暦四年三月、十代藩主重教が襲封したが、加賀藩の赤字財政は依然、解消のメドは立たなかった。

大槻一味を処断したものの、これといった新政策があるわけでない。その頃、加賀藩の租税収入は、七千三百七十貫目余、国元・江戸・大坂その他の経費、一万四千百五十三貫目余、不足高が六千七百八十三貫目余であった。支出が収入の二倍だから、これでは算盤の弾きようがない。

［金一両＝銀六十匁で計算すれば、不足高は十一万三千五十両となる］

●銀札発行と借知

そこで、銀札発行にふみきった。つまり流通市場から正銀をひきあげて、正銀使用を停止したのである。銀札発行は家中藩士の要望でもあった。藩は貸銀の払底から銀札をつくり、藩士に貸し出したのである。銀札が額面どおりに通用すれば問題はなかったが、そうは世間はあまくない。正銀との交換規定はあったが、それは実行されず、たちまち信用を失って、諸物価の暴騰をもたらした。平年は米一石が銀五十目ぐらいだが、五月には二百五十目、六月には六百五十目、七月に入ると一貫三百目、さらに月末には二貫目となり、なんと約四十倍という高値につり上がったのだ。

それに宝暦五年は不作であり、買い占め、売惜しみが値上げを煽りたて、偽札まで登場して、流通市場は大混乱に陥った。領内には数多くの餓死人がでる惨状で、銀札を恨んで領内の各地に暴動が勃発し、銀札関係の役人や富商の家が打ち壊された。この非常事態収拾に乗り出したのが、例の前田直躬であった。

彼はただちに銀札発行を停止したが、被害を被ったのは商人たちである。藩は銀札の回収に、実米・正銀を充てたが、交換は額面の十分の一ほどだったので、銀札は紙くず同然、商家の倒産が相次いだ。とうぜん藩士も被害を被った。

ついに藩では家臣の知行の借上げ（借知）を断行した。つまり減俸である。そんな折りの宝暦九年四月、金沢城下の大半を焼き尽くす大火災に見舞われた。その損害ははかり知れず、幕府から五万両を借り受けて急場をしのいだが、その復興は容易ではなかった。

前田直躬は財政収拾の見込みなしと、政権を投げ出す無能ぶりで、後を受けた老臣三人も手の打ちようもなく、領内に冥加金（献金）を課するぐらいが関の山だった。この大火の前後、城下には怪しい不思議な出来事が続けておきた。直躬の奥方や子供が急死をとげたこともからんで、さきに冤罪で処刑された大槻一味の怨霊のしわざであるというデマが流れた。怪異談も大火の前兆だったと噂されて、ますます大槻の祟り説が吹聴されていった。

この時の大火で焼失した後、再建されたのが現在重要文化財の石川門である。

●重教の「院政」の失敗

明和八年（１７７１）、重教は弟治脩に封を譲って隠退したが、財政困難と連年の凶作、それに伴う世情不安を目前にみて、じっとしておれず、天明五年に至って治脩をさしおいて政権を回復した。つまり「院政」であるが、それまで積み上げてきた産物方政策を廃棄し、徳政を実施して藩士の債務整理を強行した。

重教は産業振興政策の芽をつみ、徳政の暴令によっ金融のみちをふさぎ、富田好礼、池田正信の二人を重用したが、結局、新政策はなく、租税引き上げと藩士の借知（減俸）というお粗末さ。富田・池田らの関係者のみが、お手盛りの大幅加増し、彼らと結託した豪商木谷藤右衛門がうまい汁を吸うということになり、これを批判した者を容赦なく弾圧した。放逐（リストラ）や減封にされた者数十人といい、八家の一つ、奥村隆振も鹿島郡能登島へ流された。

しかし、こうした権勢は庇護者があってこそ、天明六年六月重教が死去するやたちまち富田、池田は捕らえられ、翌る七年四月に越中五箇山へ流刑となった。木谷藤右衛門父子も捕われ、家財闕所（没収）となり、親の貞悦は牢獄で死亡した。まったく、大槻朝元と同じような運命をたどっている。

●兼六園と赤門

十一代藩主治脩（はるなが）の治世は、明倫堂と経武館を創設し、文武の奨励を図ったぐらいで、財政再建の施策は遅々として進展しなかった。享和三年（１８０３）、治脩の跡を継いだのが、斉広（なりなが）である。

斉広は治脩同様に風紀の統制を重視し、藩士の倹約を勧め、文武の奨励を唱えた。また「改作法復古」を号して、改作奉行の廃止・十村制度の改革を断行し、隠田の摘発、引免立帰り（減税撤廃）の手段で増収を目論んだが、領民の不評をかい、一揆・暴動が頻発した。功を焦った斉広は十村が怠慢だと十八人を能登島へ流した。しかし、流罪となった十八人はいずれも優秀な十村だったので、それまでの業務が大停滞となり、やむなく全部を赦免にし本貫にもどした。業をにやした斉広は、十村制度を廃し、名称を総年寄・年寄と改め、改作奉行も廃して郡奉行一本にした。領民には増税を強いながら、斉広は文化五年一月の火災で焼失した二の丸を再建し、豪壮華麗な「竹沢御殿」を造営して隠居所とした。そのため領内に五千貫目の冥加金を献納させている。御殿の庭園には辰巳用水を引いて泉石の妙を尽くし、その規模・風光をもって「兼六園」と名付け、松平楽翁（定信）筆の「兼六園」の扁額を正面に飾ったという。

竹沢御殿が竣工して五年後、十三代斉泰が将軍家斉の二十三人目の娘溶姫（景徳院・母親はお美代の方）を正室に迎えた。このとき江戸本郷邸に壮麗な御主殿門を建てたが、これが現在の東大の「赤門」である。いうまでもなく新御殿も建設されたが、兼六園同様に往時を偲ぶものはない。

完成

●銭屋五兵衛の登場

斉広の施政は農村いじめで不人気だった。その斉広が死去して領民は「やれよかった。これで万事好都合だ」と安心したという。跡を継いだ斉泰は温厚な人物

だった。斉広時代に冷遇されていた**奥村栄実**の才腕を認め、その献策を用いて加賀藩の「天保改革」に着手する。

栄実の政策は商人いじめを特徴とした。天保八年から九年にかけて、徳政類似の仕法をもって武士・農民・町人の債務整理を強行した。さらに金銭の貸借関係だけでなく、百姓持高の質入・売買に干渉し、とりわけ寺社・町人の土地買得禁止を徹底的に実施した。これは藩士からの借地、農民からの租税を確実にするために、その負担を商人高利貸の手から救済しようと意図したものであった。

まさに荒療治であった。一方、改作奉行や十村制度を復活し、斉広の改作法改革をくつがえし、農村機構を復旧した。

この栄実と結託したのが豪商銭屋五兵衛である。銭屋は元々屋号のごとく金銭両替商であった。六代前の先祖から代々五兵衛を名乗った。金沢城下の外港宮腰に進出し、五代目の父五兵衛は醤油製造のかたわら海運業も営んだが、不況で失敗し、手堅い質屋に転じた。寛政元年（１７８９）六代目五兵衛が十七歳で家督を相続した。しばらく父親の監督下にあったが、文政七年（１８１０）に、質流れの百二十石積の船を買い取って回漕業をはじめた。これが五兵衛の海商としての第一歩であった。（以下、五兵衛を**銭五**という）

銭五の成功は蝦夷松前から干鰊（ほしか）を買い入れて領内に輸送し、巨利を得たのがきっかけとなった。銭五の海運業は国内の産業・交易が急速に発達した時代の波が追い風となり、瞬く間に拡大成長をとげた。産業振興を藩の新政策としてとりあげようとする機運に乗じ、商機をつかんだ銭五の抜け目なさもあったろう。天保期に入ると千石積以上の大船を購入、あるいは新造した。高田屋嘉兵衛の千四百石積の持船を買い取っている。また、加賀藩領内櫂数調理役（船舶の調査課税に関する役）にも任じられ、銭五は押しも押されぬ海運界における一方の旗頭にのし上がった。

銭五は全国に三十四ヵ所に支店をもち、金沢はじめ三ヶ国だけでも奉公人百六十八人、持船大小合わせて二百三十艘、資産約三百万両を有したという。当然、加賀藩は銭五にしばしば御用金を上納させている。

銭五が密貿易をやっていたという説がある。一に朝鮮近海（竹島）貿易説、二に樺太における山丹（黒竜江河口の通称）との貿易、三に北海における対ロシア貿易などで、これは当時、日本海を北前船が活発に行き交うなかで十分にあり得ることである。密貿易は莫大な利益があがる。やらない手はないだろう。

じっさい、浜田藩は竹島貿易をやって藩主以下が幕府から処罰されている。広大な海の上のこと、浜田藩ならず長州藩もやっていたようだ。薩摩藩は琉球（沖縄）を通じて、中国と密貿易をやっていたという。

銭五没落への機は、天保十四年の奥村栄実の死である。奥村に代わって政権の座に就いたのは年寄の長連弘。かれは奥村の強引な改革を批判していた**「黒羽織党」**の上田作之亟の学説に傾倒し、藩の重要ポストに黒羽織党の党員を配置して態勢を固めた。黒羽織党の新政は、諸役所の人員削減、冗費節減、綱紀粛正を行なって藩庁内外に覚醒を与えたが、一方、緊急の課題であった領国沿岸の海防施設の強化にも全力を上げねばならなかった。

●銭五の没落と悲劇

海運業の前途に不安をいだいた銭五は、三男要蔵を名義人として河北潟埋立開墾を出願して許可を得た。銭五の家存続・家産の安全分散であった。ところが、河北潟埋立は困難で遅々として進まず、経費はかさむばかりである。その上、河北潟の漁業が脅かされるのを心配した沿岸の漁民たちの工事妨害が始まった。

その執拗な妨害に要蔵は、いっそ魚類を殺して漁民の希望を断念させようと、石灰と油類（臭水＝くそうず・石油）を大量に投入したといわれている。が、この話はその後に発生した死魚中毒事件を、銭五の悪業の一つとして挿入されたものともいう。

嘉永五年七月、その河北潟の死魚を食べて中毒死した者が出た。これは銭五が投毒した所為だと怨嗟の声が上がった。おりしも銭五父子は善光寺参詣に出掛けていた。これは嫌疑を逃れようとしたのだと推測され、帰国早々、一族および工事関係者が逮捕され、投獄された。

同年十一月、銭五は吟味中、八十歳の高齢で牢死した。事件の判決は翌六年十二月、要蔵は磔、手代市兵衛は梟首、喜太郎・佐八郎（銭五の長男・次男）は永牢、そのほか処罰者数十人におよんだ。銭五の莫大な財産は没収、持船・諸道具類は競買にかけられ、藩庫に収められた。のちに喜太郎・佐八郎は釈放されたが、喜太郎は自殺し、佐八郎もまもなく死んで、さしもの銭五財閥はたあいなく崩壊した。

銭五の悲劇に対する世間の評判はすこぶる冷酷だった。米の買占めや高利の貸付けで、直接被害を被った民衆の反感を買ったからである。また、銭五の庇護者・奥村栄実を失ったことも大きな要因だった。密貿易で幕府の嫌疑もあり、加賀藩にすれば、早々に銭五に罪を被せて決着をつけたのだろう。

●その後の政局・卯辰山騒動

銭五事件を判決し、関係者の処刑を執行した翌年の安政元年、長連弘らの**黒羽織党一派は罷免**された。もともと黒羽織党はエリート意識が高く、藩士や領民からも毛嫌いされていたので、藩主斉泰が決断したものだった。

しかし、つぎに政権を担当した年寄横山隆章は名族八家の一つで、禄高三万石の家柄であったが、凡庸な人物で、幕末怱忙の時代を乗り切る政治的手腕はなかった。安政五年の凶作のさい、その処置の失態から米価が二倍に高騰した。七月十一日の夜、二千余の民衆が卯辰山に登り、「ひだるいわの…、米が高こうなって米が食えんわいや、腹へった、米よこせ」と口々に絶叫し、翌十二日夜も続いた。すると、不思議にも翌日から米価が下がり始めた。買占めしていた城下の米屋が打ち壊しを怖れて、米を売り出したからである。たが、城下を騒がせ、藩主に聞こえよがしに絶叫するとは不逞のやからであると、首謀者ら七人が捕えられ斬首された。のち綿津屋という土地の親分がこれをあわれみ、卯辰山の山麓に七体の地蔵を建てならべた。〃七稲地蔵〃といい、地蔵はみな稲束を抱えている。

この騒動で横山一派は後退し、文久二年（１８６２）頃から、ふたたび黒羽織党の面々が藩の要職に復帰した。そして、産業政策にいくつかの実績をあげた。

だが当時、京都を中心に尊皇攘夷の嵐が吹きまくっており、加賀藩でも遅れ馳せながら若干の志士の活動がみられた。しかし、政権を握る黒羽織党は旧体制派に対しては、革新派であったが尊攘派とは無縁であった。また、側用人松平大弐ら数少ない勤王志士を元治元年の禁門の変での加賀藩の不始末で、切腹・禁獄・流刑に処したので、勤王派は全滅してしまった。これが明治維新に加賀藩が大きく乗り遅れた原因である。

●結び ― 加賀藩の宿命

加賀藩の歴史を振り返ると、利家・利長・利常の草創期には徳川幕府の執拗な嫌疑を巧みにかわしながら、藩体制の確立に成功した。画期的な農村改革〝改作法〟の施行は全国諸大名を驚嘆瞠目させ、海内随一の百万石大大名としての財政基盤を揺るがぬものにした。

その成果は、五代綱紀の時代に開花を見る。「政治は加賀にあり」「加州は天下の書府なり」と賛美を浴び、〝文化大名〟の名をたからしめた。だが、一方では農業経済から商業興隆による貨幣経済へ移行する中で、加賀藩はついて行けずに苦しみ、綱紀時代の膨大な出費もあって、財政は悪化の道をたどる。

加賀藩が抱える旧体制の弊害もあった。藩政を担う一族名門の八家（はっか）は、旧来の伝統と格式にこだわり、新政策や有能な人物の登場を妨げた。六代吉徳が重用した大槻朝元がいい例である。その後は、産業振興政策を廃止したり、また復活したり、時々の政権担当者によって目まぐるしく政策が替わり、方針が定まらなかった。財政再建もやることと言えば、藩士の減棒、農民へ増税や御用金、不換紙幣の銀札、商人への冥加金など、みな後向きの政策でしかなかった。

その上、伝家の宝刀「徳政」を断行した。せっかく銭五のような海運界の豪商が出てきても、それを保護して加賀藩自ら乗り出して日本海航路の商業権を拡大することもしなかったのだ。

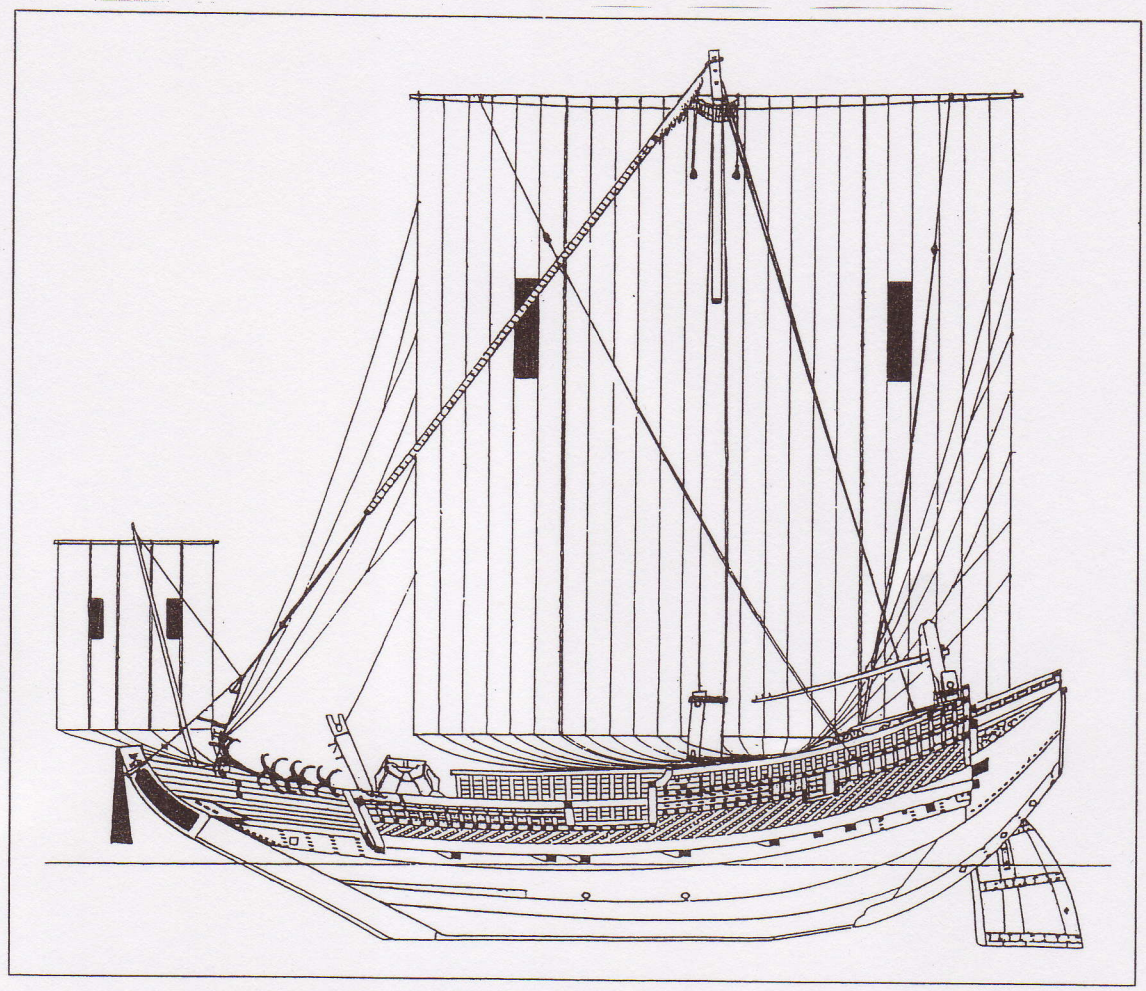
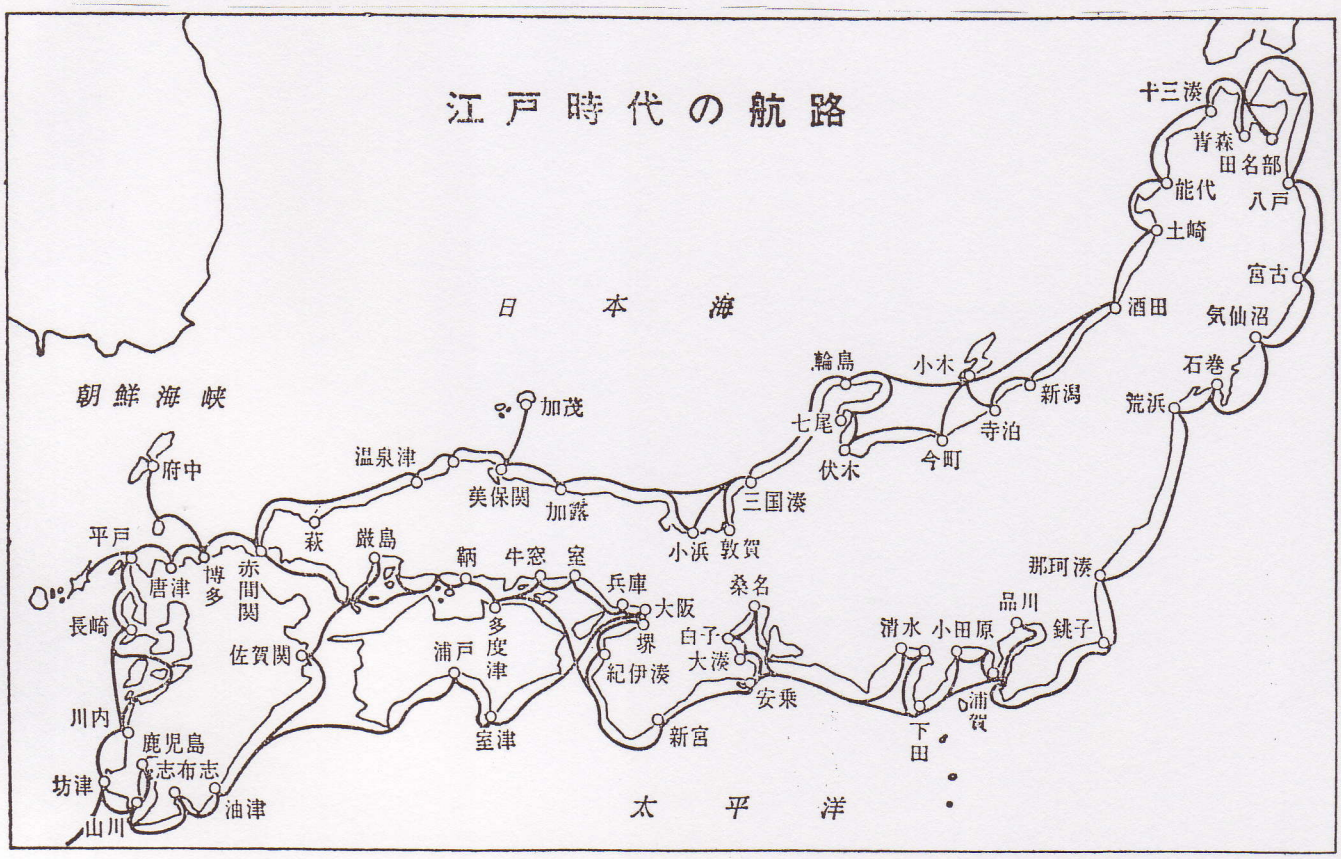
幕末に至って、尊皇攘夷運動が燃え盛る京都近くに位置しながら、加賀藩はまったく反応が鈍かった。この中央政局の動きへの鈍感さには驚く。数少ない勤王派もみな処刑してしまい、明治維新に海内無双の大藩は何も出来ずに時流に乗り遅れた。京雀たちは「剣付鉄砲　槍鉄砲　京の煙で蚊が（加賀）逃げた」とうたいはやしたという。維新後は新政府から軽侮され、加賀人はある時期まで軍・政・官界での出世は妨げられた。

【加賀藩の剣術】

富田流　中条流嫡家である富田家が、景政・重政（名人越後）以来、加賀藩に仕えて、名門流儀として「お留流」となった。

深甚流　白山の麓に棲む謎の剣士・深草甚四郎が開祖。甚四郎は塚原卜伝と引き分けたという。

義経流　義経神明流。滝長兵衛が開祖というが不明。『撃剣叢談』に「義経流の勝負するさま、右の手に太刀を振りかざし、左の手を差し延べ打たせて勝つなり」とあり、左手は餌とする古流。



19世紀初期の1000石積菱垣廻船図（全長30m、24反帆、全高28m）